

新精社協 福島県郡山市視察

日時：平成 23 年 6 月 12 日（日）10:30～13:00

場所：社会福祉法人 愛星福祉会 精神障害者生活訓練施設 北天寮（福島県郡山市）

視察参加者：新精社協 7 名 金井（夕映えの郷）、村山（そら倶楽部）、後藤（うらら長岡）、
田中（梨の里）、坂井（ふらっと）、田邊・萬羽（こまくさ）
県 PSW 協会 1 名 那須野（じょぶ倶楽部） 計 8 名

現地対応者：飯野施設長、菊池係長、佐藤主任

■郡山市の状況

- ・建物被害は瓦屋根の落下が多く、死亡者等の人的被害は少なかった。
- ・現在『ビックパレット』という体育館が避難所になっている
- ・原発問題が終息せず、30 キロ圏内ではないが地形や風向きの条件で郡山も放射線量は高い（飯館村、南相馬市など近隣市町村は年間被ばく量を超えている）
- ・行政の建物も被害があり、建物を移し行政事業を行っている

■精神科の状況

- ・郡山市内の 3 病院は、1 病院が半壊したため、残りの 2 病院に（星ヶ丘病院、県立矢吹病院）入院患者は避難している
- ※精神科以外の病院も古い病院は使えないところが多い

■北天寮の状況

- ・地震直後は、断水があり給水車もなかったため、各家庭から水を分けてもらったり、田んぼ用の用水をバケツで運びお風呂用に使ったりしていた
- ・1 週間で食べ物がなくなり、しばらくは物がなくガソリンもない状況で、1 カ月は職員の実家からお米を分けてもらい塩むすびでしのいでいた。
- ・震災後 1 カ月で支援物資はほとんどなく、社協から缶詰の提供 20 個のみ。
- ・老人施設にはものが入ってくるが、精神障害者は抜け落ちている。
- ・行政側からは「被災状況はどうか」との連絡が一本のみ。詳しい状況は地域活動支援センターで調べてくれとの対応。
- ・被災者の為にショートステイでの受け入れ態勢を整え行政にも連絡をするが、その後行政からの問い合わせが全くなく受け入れもない。（飯館村の方が 1 名、他施設からの要請でショートステイ支給されるも、病状悪く入院する）（施設側の受け入れ態勢は整っているものの行政からの発信が全くない）
- ・精神障害者は施設には来ず、病院（入院）には流れている
- ・現在の放射線量は、建物内 0.5 マイクロシーベルト、屋外 1 マイクロシーベルト、地面（土）2 マイクロシーベルト、下水・側溝 6～8 マイクロシーベルト

- ・被爆の危険性が高いため、施設の活動の見直しが必要（外での活動、近隣のごみ拾い、畑作業が出来ない。代わりに花を植えようと思ったが、収穫した種に放射線が蓄積されるため処理に困るためそれもどうか…）
- ・利用者の方々は体調を崩すことはなく、逆に「こんな状況なのだから頑張らなければ」とたくましく生活している
- ・利用者の家族からの連絡問い合わせは3名のみ
- ・施設から退所し単身生活を送っているOB・OGの利用者の家族からの問い合わせの方が多かった
- ・原発20キロ圏内に住む利用者の情報が全く分からない（5名は生死も不明）

■福島県 PSW 協会の動き

- ・避難所での相談等を開始しようかとの話もあってようだが、実際は動きがない（動けない）

■問題点等

- ・行政からの問い合わせや情報が殆どなく、発表された情報にも信用できない状況。行政に対する不満が大きい
- ・福島県の精神障害者の施設同士のネットワークが脆弱で連携が取れないため情報も入手困難。行政とのやり取りも各施設ごとしか行わず、こびているので立場が弱い。施設同士のつながりががないためでの自己完結（病院内抱え込み）の支援になりやすい。
- ・原発問題がいつ終息するか先が見えない。若い世代の将来が不安。
- ・線量計が高価で品薄のため施設では手に入らない

■その他（生活訓練施設の移行についてなど）

- ・福島県の生活訓練施設は3施設（郡山市2、喜多方市1）
→市の意向としては就労への思いが強いようで、日中の自立訓練に対しての理解が乏しく意見が通らない状況が長年続き、許可が下りるまで4年経過した
- ・地域により温度差あり（浜通りは作業所多く、会津は活発、県南は行政が興味なし）
- ・活動が活発な団体→郡山コスモス会、アイ・キャン、あさかの里など